

「ホリスティックな捉え方」

今回のブログは、エリーといさどんとの対談第4弾です。

エリー：

うつ病が拡大している社会病理（特に競争社会）の問題と、うつ病にかかる人の心のあり方の問題（抱え込んでしまう性格、私の強さ、負けず嫌い等）はどのように関連しているのでしょうか。「社会病理を体現してしまう本人の性格」と理解すればよろしいのでしょうか。

私見としては、今までは全く別々のこととして、社会病理の問題と個人の内的な問題を考えていたのですが、最近はこの二つが関連していると思っています。個人の内面に社会病理が具現化されていますし、個人が集まってこの競争社会を形成しているのですから、当然関連しているということは理解出来ています。そこのところをもう少し明確にご説明いただけたらと思います。

いさどん：

まず、社会病理についてですが、近年の社会は病気に限らず問題事の発生源になっています。この原因を探っていくと、人間たちは元々自然の中で生かされ、自然に感謝し、自然を神と讃えてきた歴史があります。これは東洋的な考え方ですが、西洋的考え方でも、個人の願いや目的を達成する時に大なるものに委ねるという精神が、過去の人々の営みにありました。しかし、近年、人間が個々の願いを叶えていけるような構造になり、豊かな社会が出来てきました。ところが、現実にはその豊かさは一方的に偏った状態です。一方的な豊かさ、物質的・金銭的豊かさを人々が求める結果、ある特定の国々や人々に偏った豊かさがもたらされるような構造になっています。

過去の時代にも人々には格差はありました。それは人間の社会にのみ、あり続けているものでした。自然はすべての存在に平等にあり続けています。そして、格差のない世界が構成されています。しかし、それが現代社会のような物質的なものに偏ることによって、地球規模の問題になってきています。そして、それが病的な症状をもたらす原因であるということがわかります。わかりやすく言うと、人類は今、生活習慣病と飢餓に陥っている状態と言えます。そういった意味では、地球が今、人間のこういった営みによって行き詰まっているのです。

ここまでは地球規模で捉えた話なのですが、現代社会という視点から捉えると、問題事を発生させる仕組みによって社会が支えられていることが観えてきます。本来、医療は病気を治すことが構造的役割であるべきです。それが、医療自体が新しい病気を生むような構造にもなっており、そういう仕組みがないと医療現場が維持されないという現実があります。ですから、社会がどんなに進んでいっても問題事によって支えられている構造がある限り、問題

事は尽きないということになってしまいます。それは医療に限らず、政治の世界もそうですし、アメリカに象徴されるような訴訟社会も同じ構造の中にあります。教育も社会ニーズに応じた教育がされています。ニーズに問題があることに気づいている人は少ないのです。

根本的な問題を解決するには、社会の根本的原因を捉え、それを取り去っていくことが必要です。その中には当然競争社会も含まれるわけです。競争の中で敗れた人たちは負けたことによって落ち込み、心が陰性になり、うつ病の原因にもなります。また、勝ち組の中にもそれを維持し続けなければいけないプレッシャーから、ストレスが溜まりうつになっていく構造になっています。当然、対立的であったり抱え込む個人の性格は、そういった症状を促進していくこととなります。

エリー：

今お話を伺っていて、いさどんの自然観と自分の思っていることが違うのかなと感じています。動物社会や生物レベルの世界を観ていると、競争原理が働いていると思います。完全に調和して生きているわけではなく、人間よりも少し過酷な世界に生きており、自然淘汰が当然のように行われているような気がします。人間は、文明を発達させていく中で、「自分たちは動物や植物とは違う存在である」というプライドを持ち、弱者が淘汰される運命というものに逆らうような考え方が社会から生まれていったように感じます。原始共産主義の社会もありましたし、キリスト教の原始的な集団もありました。生物的な社会における運命的な弱肉強食の世界を乗り越えようとする動きがあったと思うのです。もちろん、権力や富を自分たちのものにしてしまおうというような権力構造もあります。人間が他の生物と違うことの証として、人間の平等を理性の力で勝ち取ろうとした動きは人間社会の中にあっただと思うのです。カトリック的な考え方だと思うのですが、人間は動物や植物とは違う「神に選ばれた存在」としてこの世界を創っている。自然の営みに調和していく生き方も素晴らしいと思うのですが、それを超えた理性によりコントロールされた社会というものが大切なのではないか、という想いも自分の中にあります。

障害を持っている人たちに対して愛や寛容の心、平等の心を持つことが一番大切だと私は思うのですが、人間の尊厳が彼らにも当然備わっているということで、その人たちの存在を大切に生きていく、その人たちから学んで生きていくことが大切だと思います。精神障害者の歴史を見ていきますと、例えば、ジャンヌ・ダルクという人がいましたよね。フランス国家を救ったと言われており、今のカトリックの視点で言えば聖人とされていますが、当時は異端ということで宗教裁判にかけられて処刑されました。今の医療では彼女のことを統合失調症と診断すると言われています。統合失調症と今の社会で言われる人が、神の使命を受けてフランス国家を救ったという歴史的事実があるわけです。そうすると、精神障害や知的障害と言われている人たちが、大きなメッセージを持ってこの世に生まれてきていることを代弁していかないといけない、というのが障害者の医療、教育、心理に関わる人たちの信念だと思ふのです。

いさどん：

この対談を聞く人にとっては、興味深いところだと思います。実は最終的には同じなのですが、部分的に区切って見ていくと、立場の違いによって見解が変わってくるということだと思います。まず私の考えとして、この世界に起きていることは必然で起きているということです。人間の社会でも動物や植物の世界でもそうですが、誰も否定されない。否定されてはいけない。全て必然であり、起きるべくして起きています。私たちが一見問題事として見ていることも同じことで、エリーはカトリック的とおっしゃるのですが、決してそれはカトリック的なことではなく、この世界の根本的な仕組みだと思っています。今私がしてきた話は、うつ病や社会病理という視点から区切って捉え、私が歩んできた立場から観える景色を情報として話しました。そして、違う歩みをしてこられたエリーや医療関係者の人たちから観れば、違う景色がそこにはあるということです。それを私は否定しません。皆それぞれに理由があって、ここまで歩んできているのですから。

人間が人間以外の生き物とは違うということに対して一番わかりやすいのは、この世界に対する役割の違いなのだと思います。人間以外のものには、自らが発展的にものを考え実現させていくという機能が与えられていません。この世界の仕組みの中で仕組みのままに存在しています。一方、人間は自らが考え出来事に対処しながら、その問題事を解決していくことが出来ます。そこに人間の進化があり、最終的に人間らしさ、人間の尊厳というものが与えられるのです。宗教的に言えば、神様が人間にそういう能力を与えられたということです。違う捉え方をすると、神がこの世界を創っていく過程で、自らの力を人間に与えた、と言ってもいいのかもしれません。そういう意味ではこの世界を運営していく上で、人間は神の代理としての非常に大きな役割があるということだと思うのです。そういった中で問題事が発生しているわけですが、それを大いなるものの意志がある目的にいなっていると考えれば、世界の構造を私たちは理解し、その理解のもとに冷静に対処していくことが出来ます。大いなるものから私たちは何かを託されているといったことが観えてくると、問題事は新たなところへ私たちが進んでいくためのプロセスであり、それを問題事として悩んだり、行き詰まってしまう必要はないと考えます。

それと対比させるのが、今の自然の中にある世界です。私は今、現代社会と自然というものを対比させて説明してきましたが、「自然の中にこそ新たな社会が求める方向性があり、自然回帰するべきだ」と考えているわけではありません。大きく捉えれば、今の人間的、人工的なあり方も自然の仕組みの中にあるのです。この世界は原因と結果の積み重ねの連鎖ですし、そこには目的があります。例えば植物があり、植物は土から育てられているのですが、植物が虫に食べられ、その虫を食べる虫がいて、その虫を食べる動物がいて、その虫や動物たちはいずれ排泄したり、自分の命を全うして死ぬことによって、その肉体は土に還り、また植物を育てていきます。そういった自然の中の生態系や食物連鎖という構造で自然が表現する世界や目的を観ることが出来ます。

自然も区切って観ていけば、植物が一方的に土から栄養を搾取していたり、虫が一方的に植物の命を奪うという弱肉強食があるわけです。動物の世界でも、肉食動物が草食動物を食べるということは一見命を奪っているように観えるのですが、自然の構造というのはそのように区切られて存在しているわけではありません。自分の存在は他の存在によって生かされ、自らの存在も他の存在を生かすために存在しているという利他の仕組みによって成り立っています。そうした命の連鎖がこの世界を構成しています。そして、自然界というのは生命の連鎖だと考えることが出来ます。私たちの体の構造についても同じです。独立した小さな細胞の一つ一つが連鎖し、もう一つ大きなパーツをつくり、さらに大きなパーツをつくり、様々な仕組みによって一つの体が出来ています。一番小さい単位で言えば、素粒子という無限なる存在の連鎖によって出来ています。そういったものが集まって地球というものが構成され、太陽系、銀河、さらに全宇宙が同じ仕組みの中で構成されていると捉えていくことが出来ます。

そうすると、弱肉強食のように観える自然界においても、シマウマはライオンに命を奪われているのではなく、シマウマの命がライオンの命にバトンタッチされているのです。それは命の連鎖であり、命は場所を変えて存在し続けているのです。この世界は死のない世界なのです。それが自然界の姿であり、自然の中にはバクテリアやカビのようなものから、植物から動物、虫も人間も含め、どれもがしっかりと全体を支え自分の役割を果たしています。今の人間たちが歩んできた構造的な問題事を解決するために、ここから学ぶべきことがあるのです。私はそういう意味での情報提供をしています。ですから、自然回帰ということではありません。今まで人間たちが個人個人の欲望を叶えようとした結果進化してきたことを活かし、自然の中にある全てのものを平等に活かしていくという構造を取り入れた時に初めて、次の社会がもたらされるのだと思っています。

次に、障害者の存在についてです。この社会は健常者によって維持されているように思っている人もいますが、私はそのように考えていません。自然界でも、バクテリアはあまりにもその存在が地味で小さいものですから、自然の世界を支えていると捉えることは難しいかもしれません。しかし、バクテリアのようなものたちが大きな植物を育て、栄養を提供しているのです。私たちは農業を営んでいますが、農夫が畑を創っているのではなく、健全な畑ではバクテリアが畑を作り植物を育てている、というくらい大きな役割を果たしています。私たちの体についても同様で、バクテリアやバクテリアが出す酵素というものが口の中や胃の中、腸の中で働き私たちを支えていることは誰もが知っていることです。

それと同じように、障害者こそ、健常者である人々に健康の大切さを伝えてくれる大きな役割を担っているのだと思います。そういった人たちと出会い、そういった人たちと共に暮らせる優しい社会を創ることの大切さに気づけるのも、そういう人々の存在があるからです。私たちが学んでいく上で、障害者の人たちは大きな学びを与えてくれているのです。そうい

う意味では、障害者の尊厳が保たれていくことは非常に大切なことだと思います。ただ、今の福祉制度の中で、障害者は弱者として保護されるというように偏っているのはいかがなものかとも思います。弱者ということで保護してしまうというのは、逆の意味でそういった人たちの存在を否定したり、尊厳を奪ってしまうようなことにもなっているのです。私は障害を個性であると捉えています。ですから、障害者を一方的に特定の施設に囲ってしまって、弱者として保護していくようなあり方は問題であり、障害者と健常者がお互いの役割を果たしながら共に暮らせる社会づくりが必要だと考えています。そういった意味で、障害者に優しい社会を創っていく必要があると思っています。

今の社会構造の中には、問題事を解決していくという時に、障害者をより多く生み出しているということもあると思います。医療が進んでいきますと、過去には生存出来なかった人が救われていき、それが新たな障害者として存在することになります。しかし、それを救ってはいけない、ということをごここでは伝えたいわけではありません。それも新たなメッセージとして、私たちに学びを与えてくれることだと思います。ただそういった捉え方をしていないがために家庭や社会の中の負担が増し、新しい問題事の発生源になっています。そういったことも踏まえて、ホリスティックに障害を捉えていかないといけないと思っています。

過去の時代には異端として迫害されたジャンヌ・ダルクが、現在は聖人として捉えられ、同時に統合失調症と診断されるという観方もあるとすると、私たちは改めて冷静で広い判断のもとに正しく物事を捉え、学びとしていくことが大切なのではないかと思っています。私の考え方としては、エリーの歩んできた道を否定するものではありませんし、今の医療や社会構造を否定しているわけでもありません。そこから学び、問題事から新たな世界へ進むための材料提供みたいなものだと考えています。そういったことで、お互いにわかり合えると思っています。

エリー：

現代の科学、あるいは私自身が分けて考えることに慣れているのですね。いさどんが、自分の思考と全く違う考え方から、現代の色々な問題を捉えていらっしゃることがよくわかりました。

いさどん：

そうですね。科学というのは分ける学問です。学問上、区切るとより深く探求することが出来ますから、科学という捉え方は有効なものです。自然界は科学で分けられるのですが、それが一体となってホリスティックにつながり、働いているわけです。科学は、分けたものをそこで完結させるのではなく、様々なものを総合的に合わせ、この世界がどう存在しているのかということに対して活かしていけば、未来は明るいと思います。そのように、一つの視点から観えるものが全体の構造にどのようにつながり、全体の構造が部分的なことに対してどのように働き、関係性を保っているのかという観方を私は今までしてきました。

エリーが捉えてきたものの観方と私が歩んできた捉え方の双方を融合すると、新しい世界がよく観えてくるだろうと思います。そういうふうに融合し調和していくことがこの世界の姿であり、神様はその両端からメッセージを与えてくれているのだと思います。宗教観、世界観で捉えていくことも出来ますが、それを科学的に捉えていくことすら神様の意志であり、宗教観であるのです。その両面から捉えていく柔らかさが、今の時代、必要とされているのだと思います。

今日はうつ病から話が発展していますが、社会病理もそこにあるのです。どれも否定されるものではありません。今、問題事として現れていることも、人間をより進化させていくためのものであるのです。それは善意であり、問題事の奥にあるメッセージを捉えて改善していくことによって高い能力が与えられ、そこに人の価値があるのだとしたならば、問題事こそ善意です。問題事は、人間の尊厳を保っていくためのきっかけになるものであり、私たちが成長していくための一番大切なものである、と捉えればいいのではないかと思います。

うつ病の話に戻りますが、うつというものは状態が進んでいくと、統合失調症のような生涯に渡る病気に至ることもあります。そういうことから問題事は早い段階でしっかり見つめ、学びに結びつけていくことが肝要です。そして、すべてはメッセージとして与えられているということです。それは私たち健常者のためにもあるということにもなります。

もう一つは、障害の中にも先天的障害と後天的障害があります。つまり、元々魂的にそういった精神構造を持つ人として生まれてきたという人もいます。と同時に、遺伝的に欠陥や問題を受け継いできている人もいます。このように先天的なことについては、肉体的、そして精神的に分けられます。次に、後天的に与えられるものとしては、家庭的な環境や社会的な環境などがあげられます。肉体に対する事故や生活習慣から来る病気から障害に至るということもあります。いずれも社会が持っている構造的なものが病理の原因として表われてくるものです。つまり、社会にそういうものを発生させる構造があるということです。先天的なものは、元々この社会や人間の中にある構造的なものを知らしめるために、その人が役割として生まれてきているのだと思います。後天的には、この社会にストレスや問題を発生させる構造があるわけですから、それを伝えるメッセージとして発生しているのだと思います。この世界は仕組みとして原因があり、それにふさわしい結果を発生させています。そして、その結果を発生させるための場が創られ、それこそが目的になっているのです。

ちなみに、うつ病の人の人生を物語と捉えた時に、その物語には背景があります。それぞれの物語を舞台の演劇とし、そこには役者がいるわけです。それは自分という主役、それから家族という準主役や脇役であったり、社会という舞台があるわけです。そして、うつという病気を通してその人の人生が表現されていきます。その演劇の目的はどこにあるのでしょうか。それはまわりの環境のために病気を発生させるべき構造があるということでもあります。

家系という視点から捉えると、酸性体質であったり、アルコールを沢山摂取したり、甘いものが非常に好きな家庭であったり、肉食に偏った食生活とか色々な人のあり方が代々伝承されていくものです。そういった中で、うつ病の原因の伝承の上でうつ病が代々受け継がれていくということになります。ですから、うつ病も家系の伝承から発生するものとして捉えることが出来ます。そういう捉え方をすると、うつ病にかかる人の心のあり方、性格的なものすらも代々伝承される場合があるということです。さらに、その人の魂、心の癖のようなものからうつ病が発生することもあります。

社会病理から個人的なものや家系的なものが密接に絡み合いながら、複雑にうつ病が発生していると捉えることが出来ます。根本的な問題解決としては、一人一人の物語としてだけではなく、社会と一人一人の物語としてホリスティックに捉えていくことが大切です。病気があり続けるということが目的の場合もあれば、病気を通して関係する問題事を解決していくことが必要である場合もあります。うつ病だけで区切ってしまうと、ホリスティックな捉え方が出来なくなってしまいます。ですから、科学的、多面的に捉えながら、ホリスティックに何を示されているのか、と両面の捉え方が必要であるということに行き着くのだと思います。

医療現場が今の形で対処療法を行っているのはやむを得ないことですし、有益な働きを果たしていることはわかっています。しかし、今後、病気に対する統合的な捉え方を取り入れていくことは賢明なことだと思います。医療が業界を維持するために病気を歓迎するような構造になっていますし、さらに病気を発生させ本末転倒になっているような構造になっているのも事実だと思います。しかし、本来、医療関係者が医療関係者としての尊厳を保っていくためには、やはり病気をなくしていく方向に活動があるのだと思います。これは過激な表現なのですが、私は弁護士と宗教家と医者が必要ない社会が健全な社会なのだと思います。医療は保険のようにしてあるだけでいいと思います。

しかし、そういった業界が現在あるということは、社会がそれを必要とする状態であるということです。社会的な構造を見直していくという意味では、医療業界だけで考えるべきことではありません。経済や政治、教育も全てが密接に関わり、事が起きているのです。個人的な性格や家系の体質、業界のことも社会全体の構造として、これから人々がどういった方向へ進み、どういった世界をつくっていくのか、ということも含めて考えていく時代が来ているのだと思います。ここではうつ病の人を受け入れ、その人の状態を構造的に捉え改善していくという取り組みを通して、広い意味で社会病理から狭義のうつ病までを捉えています。皆がそういうふうにも狭くも両面から捉えていくということが必要なのではないかと思っています。

ここにうつ病の方がいらっしゃると、まずは家系図を書いていただき、そこからその人の家系の傾向を観ていきます。自分だけが原因でうつ病になったのではないことが理解出来ると、

楽になれるのです。広い捉え方をすると、個人の問題ということだけではないものです。家系的な問題であったり、社会的な構造であったり、自分を取り巻く世界が密接に絡み合いながら病気を発生させています。個人的には自分の病気ということになりますが、それは社会の構造そのものなのです。それを有効にいかしていけば、社会を改善していくことにもつながります。改善するというと悪いことが起きているようですが、広い意味で捉えれば問題事の種はどこにでもあるわけですから、その問題事の種を取り去っていくと有益なものになります。人々がそこから学んで成長し、高い目線になっていくことが出来ます。多様性あふれるこの世界がつながってひと連なりであるということに気づくと、この世界を学ぶということにもなります。私たちは問題事を沢山もらいながら、学びの人生を生きているのです。

病気というものを個人の問題として捉えることもあれば、家系的な問題として捉えることもあります。そして、社会構造のあり方として捉えることも出来ます。そして、社会全体が病気を発生させているということです。それを構造的に観ながら全体を理解し、そこにはこれから人類がどこへ歩んでいくべきかというヒントが隠されていると思っています。それこそ、神様の意志がそこに現れていると思います。うつ病という病気からでも、この世界の構造が観えてくるものです。

エリー：

今回の対談はすっきりと知的に理解出来るものでした。私自身の狭い考えを反省致しました。どうもありがとうございました。